

絵画資料と考古学

はじめに

古代の九州を代表する文化遺産として誰もが注目するものに、装飾古墳が挙げられる。これは古墳に埋葬された死者を納める石棺や死床をめぐる衝立状の石壁、横穴式石室の壁や門石、それに入り口などに線文、浮き彫り、彩色などでさまざまな人物像や武器類、それに摩訶不思議な幾何学文を描き出すものである。日本列島にはこれまで、このような装飾が施された古墳が300基以上知られているが、そのうちの約5割が熊本県に、3割が福岡県に分布している。中でも菊池川流域と筑後川流域に顕著に認められ、5世紀から6世紀にかけての段階では、列島内のこの地域は極めて特異な様相を示している。なぜ、この時期、この地域にこうした特色ある装飾古墳が展開したのか、12回にわたって見てゆくことにしよう。

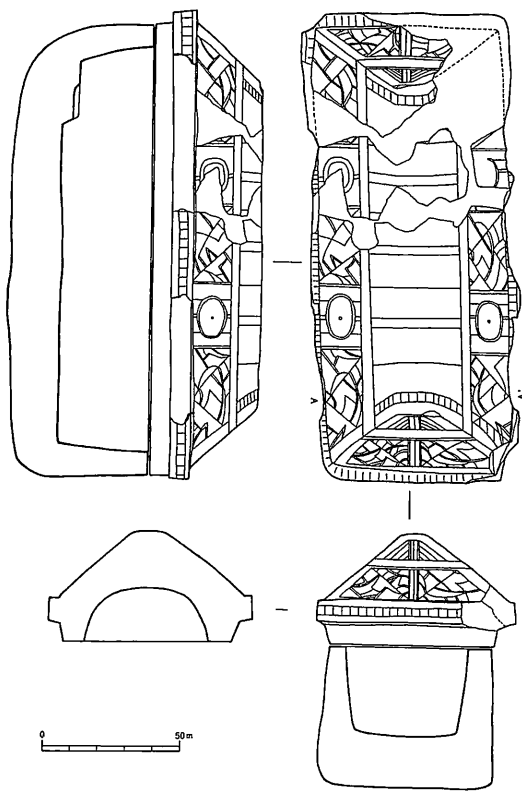
熊本県不知火町鴨籠古墳

熊本県宇土郡不知火町で出土した鴨籠石棺は熊本大学所蔵品で、現在熊本県立美術館の装飾古墳展示室で公開されている。石棺は5世紀後半の製品と想定され、家形をした長さが173cmの蓋と長さが166cmの繰り抜き式の身からなり、軒にあたる部分には四周とも直線と弧線を組み合わせた特異な文様の「直弧文」や同心円文が陰刻されている（第1図）。

この直弧文は日本特有の文様で、4世紀頃瀬戸内東部地域で出現したらしく、そのアイディアは貝製腕輪などの装飾品がもつ「辟邪」の観念からもたらされたといわれ、古墳時代には武器や防具の文様としてしばしば使用されていた。古墳に埋葬された人物を保護するために、石棺の蓋に描かれたのであろうか。鴨籠の石棺は宇土半島基部で産出する阿蘇溶結凝灰岩で製作されている。直弧文を描いた石棺で最古のものは、福岡県八女郡広川町石人山古墳にみることができ、5世紀の中頃の製作と想定されている。この石人山石棺は同じ阿蘇溶結凝灰岩製であっても、菊池川下流の産らしい。熊本県の古墳時代石棺では、4世紀の終わり頃から、副葬品の代わりとして石棺の内側に刀や刀子、鏡などを描くことがみられる。すると石人山石棺は、熊本県で製作された石棺が各地に広がってゆく魁とみることができ、古墳を装飾するという観念と技術は熊本県下で始まった可能性を示唆している。

熊本市千金甲古墳

装飾古墳を、どの部位に装飾が施されているかによって分けると、古墳内部に死者を葬るお



第1図 鴨籠古墳家形石棺実測図

棺の周りに、屏風状にめぐらされた石障に刻まれた例がまず挙げられる。その代表として、熊本市小島の千金甲古墳をみてみよう。

金峰山の南麓にある松尾集落の谷は、立田山に繋がる大断層帯の起点として知られるが、この集落の西側、海拔が90mあたりの山麓の傾斜がやや緩やかになったあたりに、この古墳は立地している。古く、大正のはじめに京都大学の浜田耕作氏により調査がなされ、小規模ではあるが、独特の装飾をもつ古墳として、大正10年に国の重要文化財に指定された。

千金甲1号墳は直径が12m、高さ3mほどで古墳としては小型の部類に属する。西側に開口する横穴式石室墳で、奥行きが2.7m、幅2.6mの墨丸方形をなし、小さな石板をドーム状に小口積みにした高さが

2.4mの石室が設けられている（第2図）。この小口積みにした石壁の内部四周に、高さが80cm、厚さが15cmほどの黒色を呈する阿蘇溶結凝灰岩製の板石をめぐらせて、さらにその内部には2枚の板石で仕切って、3人分の埋葬施設を作り上げている。

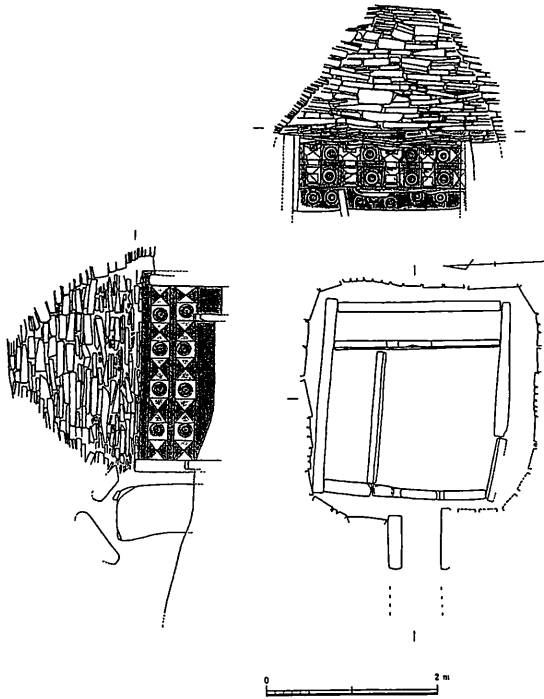
装飾は左右と奥壁に沿って立てられた石障と仕切り石に刻まれている。装飾は上下2段にわたって9個（計18）個の区画を作り、三角文を4つ組み合わせた方形の文様と円文を交互に配するのを原則としている。奥壁の石障はすこし特異で、最初は左右の石障と同様な図形を配置していたが、後に三角文の組み合わせ部分に矢を容れるための矢筒を4ヶ所追刻しているが、右側のもものは矢筒の胴部が省略されている。

これら装飾は、三角文が赤と黄色、円文は赤と青色、区画文は黄色、矢筒は白色と塗り分けであり、バックは鮮やかな朱色で統一されている。千金甲1号墳よりも直増年代がやや古いと想定されている熊本県嘉島町の井寺古墳の石障には、赤で彩色された直弧文と円文の取り合わせであるのに対して、千金甲では4色が用いられていること、直弧文はなく、円文と三角文の組み合わせ、矢筒という具象的な像が追刻されていることなどから、こうした装飾文様は、よ

り鮮明に死者の魂の保護を企図したものであることを窺わせる。

熊本県山鹿市チブサン古墳

6世紀前半期になると横穴式石室の構築が本格化し、長い羨道と前室、玄室を備え、高い天井を持つ古墳が登場するようになる。それとともに死者を納めるお棺も変化し、石屋形という特異な構造の棺が出現してきた。前に紹介した鴨籠の家形石棺墓の長側面に扉をつけて、次々に死者を追葬するのがたやすいように改造したものである。千金甲古墳のように奥室一杯に棺を拵えるのではなく、一つの石棺に死者をまとめて葬ることで、石室の空間を作り出し、死者の身近において葬送儀礼が行われるように変



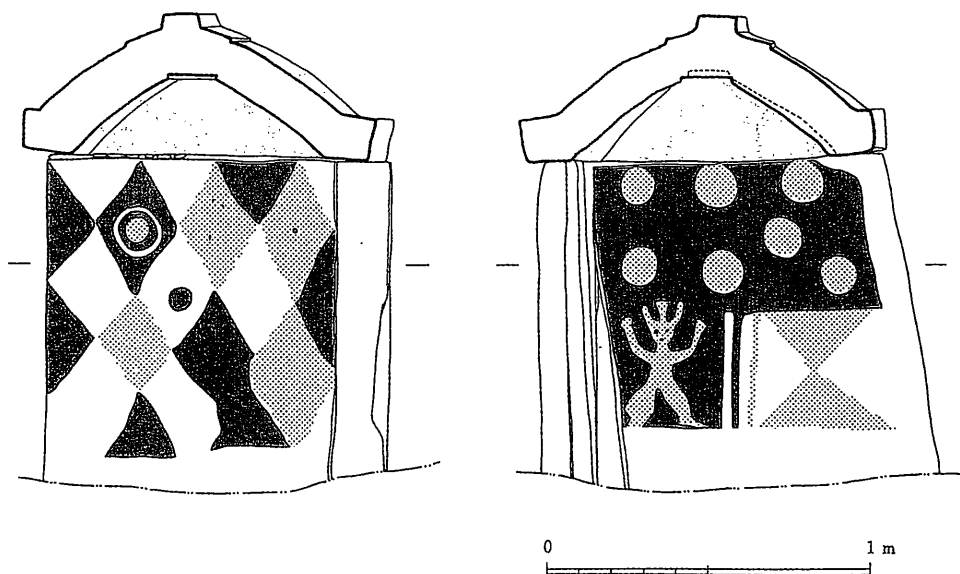
第2図 千金甲1号古墳石室実測図

化していったことが想定できる。

その代表的な例として山鹿市チブサン古墳を挙げることができる。チブサン古墳は菊池川中流域に注ぐ、岩野川に面した小さな丘陵の緩やかな傾斜地にある前方後円墳で、古墳の長径は44mを測る。現在は古墳を取り巻く周濠は埋められているが、最近の発掘調査において幅が約1mの浅い窪地があったことが確かめられている。

石屋形の内面には、赤、白、青の三色で彩られた菱形文と円文が装飾されている。奥壁中央二つの並んだ、赤色で縁取られた白色の円文には、真ん中に青色のドットが描かれ、あたかも女性の乳房を象徴しているようにみとれ（第3図）、古墳名の由来となった。このため古くから「乳をだす神様」として崇められ、甘酒を供えて祈る風習が最近まで続いていた。石室右壁下段には赤色をバックに、白色粘土で冠と思える3本の山形突起の冠を被った人物が両手両足を広げ、声を出さんばかりの形相で描かれている。これまでの抽象的なモチーフだけで構成されていた装飾古墳の世界に、具体的な人物像が登場し始めて、装飾古墳の世界に変化の兆しが見え始めてくる。

チブサン古墳にはまた別の特徴がある。それは石室入り口付近に、1体の石製人物像が建てられていることである。本来は別々の機能をもっていた古墳を巡るさまざまな要素（イメー



第3図 チブサン古墳後室家形石棺実測図

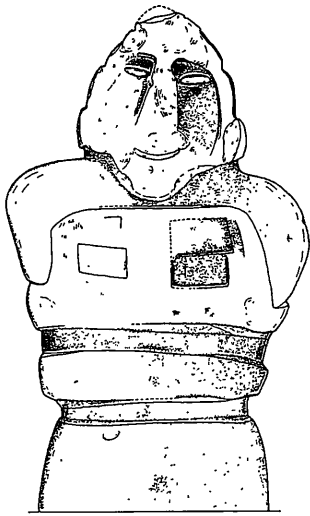
ジ) が、次第に結集されて、あの竹原古墳の装飾絵画にみられる葬送儀礼への一元的世界へと収斂してゆくのである。このことについては最後に述べる予定である。

大分県臼杵市臼塚古墳石人

チブサン古墳の墳丘に1体の石製男性像があり、あたかも横穴式古墳石室入り口を守護するかのようによえられていたことは前回述べた。こうした石製の彫像は古墳時代中期から後期にかけて熊本県北部地域から福岡県南部地域にかけて特異的に分布していて、ちょうど装飾古墳の広がりとも重なり合うようにみられる。ここに紹介する臼塚古墳発見の石製短甲（鎧）は、装飾古墳や石製彫像の主たる分布地域からはずれているが、石製彫刻品の初源的なタイプに属していると学会では想定されている。またこの鎧を飾る円柱状のものを杵とし、それを受ける台を臼と見立てて「臼杵」の名の由来となったことでも知られている。

一般的に石製装飾品と呼ばれているものには、二つの系統がある。一つは古墳の周辺に埴輪と同様な役割を担って、埴輪と同じように立てられたもので、熊本県中・南部の古墳に多く見られる。これは近畿地方の古墳でしばしば器物を模造した木製品が埴輪と混じって立てられたものに類似している。もう一つは墓守としての武人像で、九州の古墳にのみ特殊にみることができる。

墓守としての武人像が現れる最初の事例がこの臼塚古墳出土品である。さほど立体的な作りではなく、兜と草摺の明確な表現差はみられないが、武具を象ったものであることは容易に理



第4図 三ノ宮古墳石人実測図

解できる。これら石製装飾品は2点あり、本来、古墳の前方部と後円部の接合部に並んで据えられていたと想定されていることから、死者を埋葬した石棺へ通じる墓道の両側を守護する役目を果たしていたと思われ、辟邪の表れとみることが可能である。この外部からの入り口を守るという思想は装飾古墳にはなかったものであり、この白塚の石製品は、具体的な人間像が描かれるきっかけとなったと推定される。

6世紀段階にはいると、墓守としての武人がより明確な形で表現されるようになる。これは熊本県荒尾市三ノ宮古墳出土の石人像で窺うことができ（第4図）、さらには装飾が施された古墳にも、墓を護持する目的で埋葬主体が置かれた古墳の通路に据えられていたことは、先にチブサン古墳でみた。こうした古墳の外部にあって古墳に葬られた人物を守護する武人さえもが、最終的には古墳の内部石室に組み込まれていったのが、装飾古墳の最後の段階である。

熊本県石貫ナギノ横穴墓

古墳時代の後半期には小さな円墳が多く集まって群集墳を形成するのが一般的なありかたであるが、地域によってはこうした群集墳がまったく築造されないこともある。熊本県北部菊池川流域もその一つで、その代わり5世紀の終わり頃から七世紀初めにかけて、阿蘇溶結凝灰岩の崖面に横穴を穿って多数の人々を埋葬する習俗がみられる。1遺跡では4～5基で構成される例もあるが、大半は100基から200基と数が多く、鹿本郡鹿央町岩原横穴群や菊池郡七城町瀬戸口横穴群のように、300基以上で構成されることも知られている。この地域の横穴の構造は極めて特徴的で、穴の中には死体を置く死床が「コ」字形に配されていて、少なくとも3人の死者を葬ったことが分かる。また時には死者を横たえるための枕が各死床に2つずつ掘り込まれていたり、中央通路でも死体が発見されることから、1基の横穴では10人前後の死者が埋められていたと想定することも可能である。山鹿市西部から鹿央町北部地域を熊本大学考古学研究室がかつて調査したところ、この地域では800基以上もの横穴が分布していることが判明した。

装飾は盛り土をもつ古墳ばかりでなく、こうした横穴墓にも描かれることが少なくない。4～5基から10基ほどの小単位で構成される横穴墓では、ほとんどの墓に、50基以上の横穴墓で

構成される事例では、5基から10基のまとまりのうち、1～2基に装飾が認められるのを通例とする。玉名市石貫ナギノ横穴墓も群集する横穴墓の代表的な遺跡で、34基中15基に彩色が施されている。第8号墓では羨門とその外部にある2面の飾り縁には細い線で二重の同心円と格子文を並べ、それを赤色で塗り分けている。また一段と高く築かれた奥死床には、横口式の家形石棺が彫りだされていて、その屋根には弓矢が、石棺には格子文と同心円文が刻まれている(第5図)。

横穴墓にみられる装飾は、このように円文と格子文を中心とした幾何学文が多用されるが、矢筒や矢、馬、人物などが入り口外面に浮き彫りされている例も点々と見出せる。また石貫穴観音2号横穴墓のように、「千手観音像」を浮き彫りしたものもあり、横穴墓にみられる装飾は多分に観念の混合が窺われる。

古代中国の絵画(1) 二桃三殺

日本の弥生時代から古墳時代にかけてのころ、中国でも墓の中を絵画で飾る風習が広くゆきわたっていた。木製の棺や槨(墓室にあって棺を容れるもの)に彩色したり、棺を包む帛に絵画を描くもの、磚(煉瓦)で造った墓の内部に漆喰を塗り、その表面に彩色するもの、磚自体に文様を描くもの、墓室の壁に文様を浮き彫りするものなど多種にわたっている。またその描かれたテーマ・モチーフも多様で、中国各地でさまざまなヴァリエーションをもって展開している。

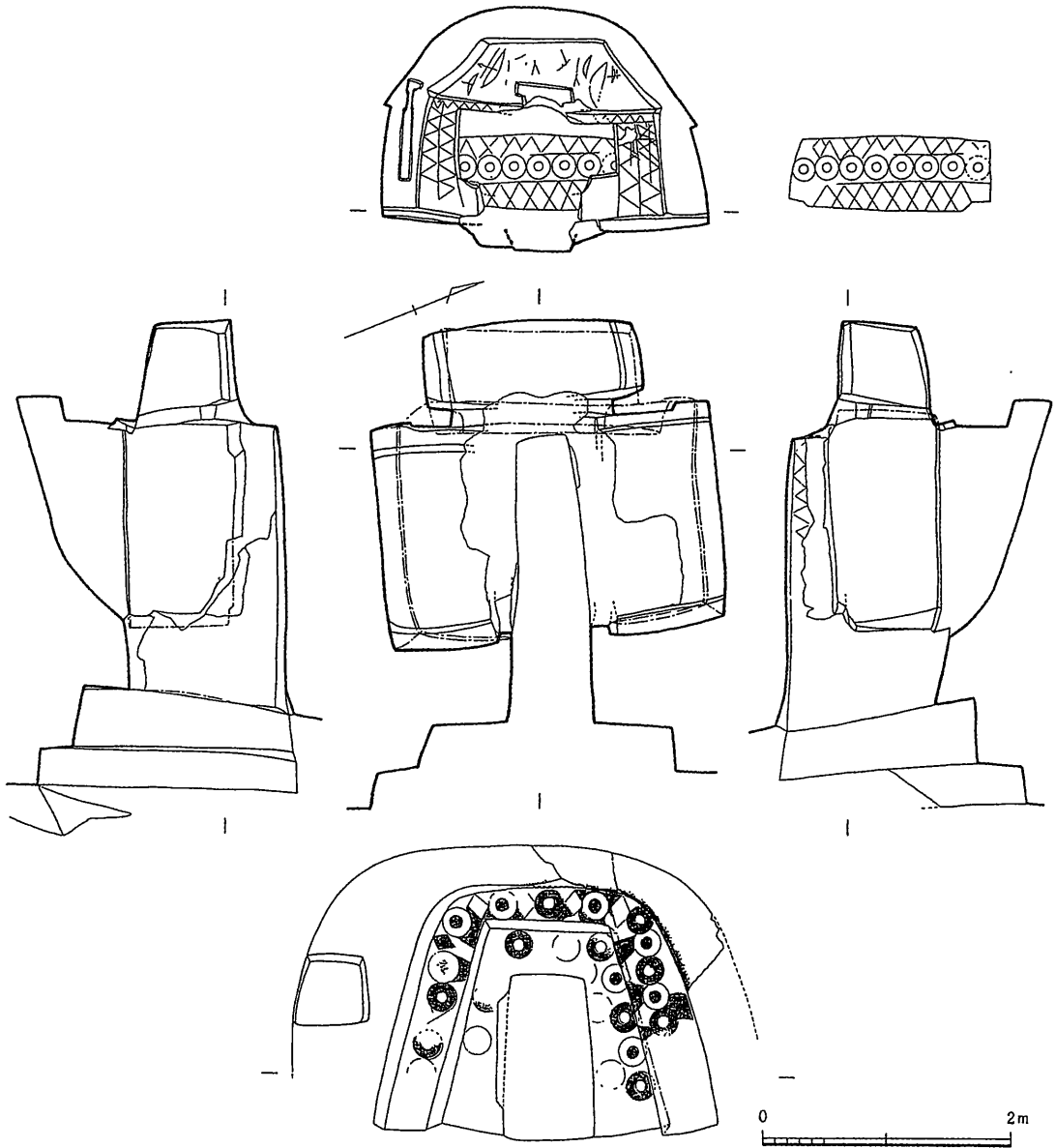
磚に絵画を描く手法は、中国で構造物に磚を使用し始めた当初から出現したとみなされている。最初に登場する磚は長さが1 m以上で幅と厚さがそれぞれ40cmと30cmほどの大きさで、内部が空心となっている。戦国時代の終わりころ、河北省や河南省でこれまでわずかに発見されているにすぎない。その存在が明確になるのは、秦の始皇帝が築造した西安の咸陽宮の宮殿を飾る磚であり、斜格子文や環文で前面が飾られる。前漢中期になると、空心磚も小型になり、墓を構成する素材として使用されるようになり、その表面に貴族の日常生活の一面が1カットずつ浮き彫りされるのが画像磚の始まりで、その後、木材の不足を補うために磚室墓の構築が盛んになると、中国の主要な地域へと分布の拡大がみられた。

後漢代の画像磚は河南省南部、とりわけ南陽を中心とした地域でめざましく発展したが、これは後漢の創設者である光武帝の出身地が南陽であることと深い繋がりがあり、後漢の成立とともに光武帝の一族郎党や支持者が全国に散らばっていったことと関係するというのが熊本大学考古学研究室助手の山下(岩崎)志保さんの論である。

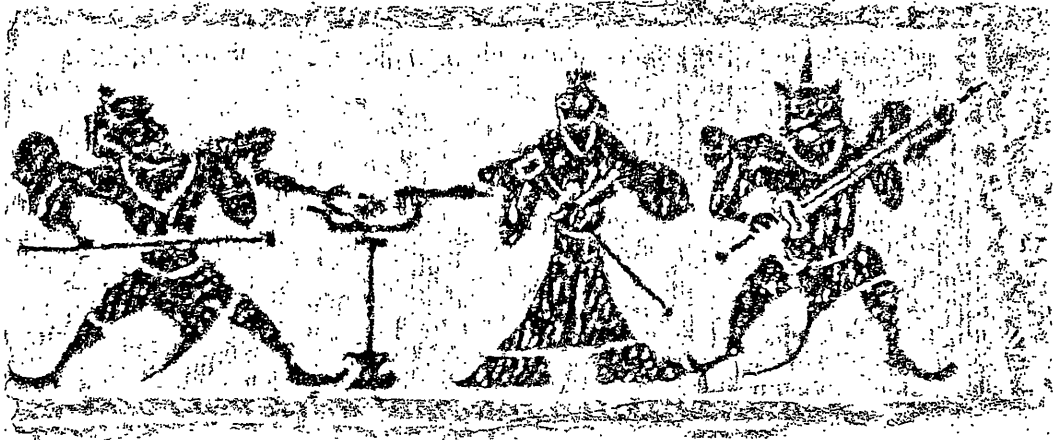
南陽を中心とする地域での絵画磚の主要なテーマは神話・伝説・故事で、中にはお面を被っ

た登場人物も描かれていて、あたかも墓に埋葬された死者に演劇を鑑賞させる意図をもっていたのではと、想像することも可能である。

ここで取り上げる「二桃三殺」もその一つで、古代中国人に好まれたモチーフであった。絵の中央に高台のついた皿があり、その上に二個の桃が載せられている。剣を帯びた二人がまさに桃を取ろうとしている一方、右端の人物は怒りのあまり自殺を遂げようとしている図が描かれている（第6図）。これは『晏子春秋』にある逸話からとられている。春秋時代斉国の景公の時、必ずしも王命に服さない武威盛んな三人の勇士、公孫接、田開疆、古冶子を宰相の晏嬰



第5図 石貫ナギノ8号横穴墓実測図



第6図 河南南陽二桃殺三士画像

が謀をめぐらせて三人を自殺させ、取り除いたというものである。これ以外にも日本で馴染みの深い、秦始皇帝を暗殺することに失敗した荆軻の咄なども取り上げられている。墓に対するイメージが日本のそれとはまったく異なることが窺える。

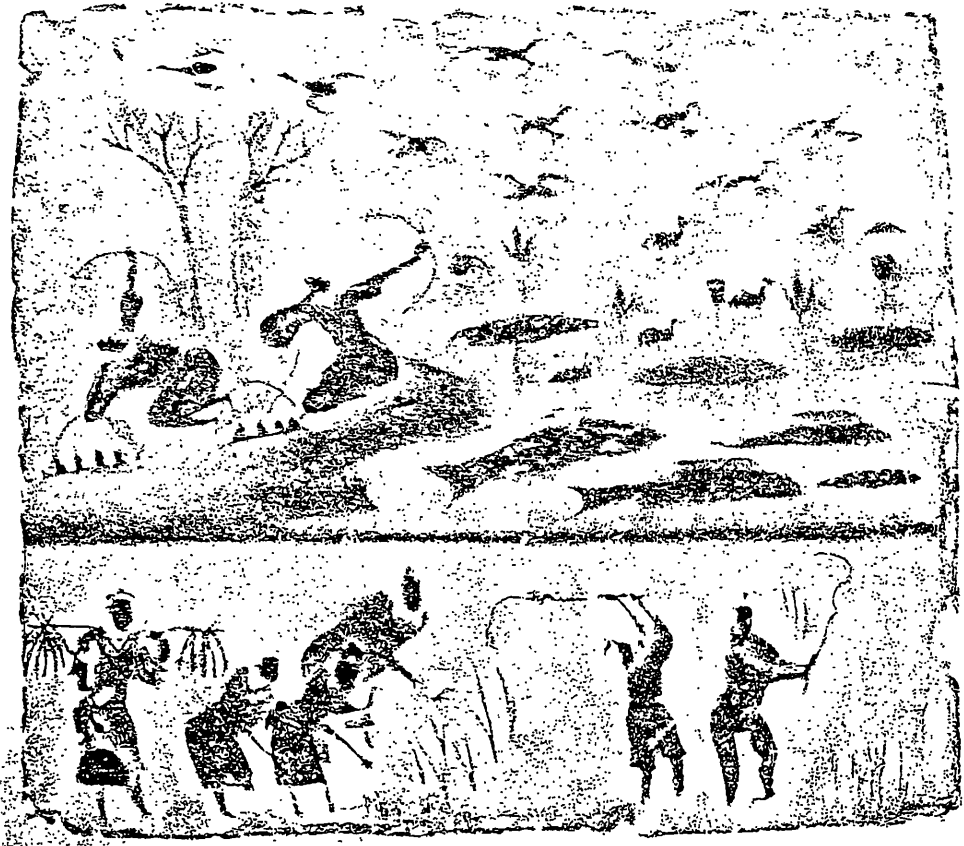
古代中国の絵画（2）弋射収穫図

漢代の中国で、山東省、河南省と並んで画像磚が際だって展開するもう一つの地域として四川省が挙げられる。四川省は古来巴蜀と呼称される一大盆地で、周囲を自然の障壁に囲まれて独自の世界を形成してきた。秦による征服以後水利施設の整備などにより、大穀倉地帯に転換し、漢人などの入植により、漢代以降中国的世界に組込まれて行くようになる。

画像磚で墓室を飾るのもその一つの表れで、多用な日常生活が具体的に生き生きと描き出されているのが、四川画像磚の特徴の一つとなっている。神話・伝説を描く場合でも中原にみられるストーリー性はなく、単発的な描写に留まっていて、即事的な内容であることが多い。しかし、このことがまた四川画像磚の歴史的意義を高めているのであり、文献によっても窺うことができない実生活の側面を垣間見ることができる。

四川省の墓室を飾る画像磚は、木製の枠に粘土を詰めて製作されるために、同一の題材のものが比較的多くみられるのも特徴の一つである。この「弋射収穫図」もそうした当時の四川に生活する人々のありふれた日常生活の一コマを描いたものである（第7図）。

画面は上下二段に分かれ、上段には池で泳ぐ魚や鴨の群を描き、空を飛ぶ雁を弾弓で打ち落とそうとする人物が二人みられ、彼らの足下には弾を結ぶ糸巻きがある。下段には中央部に手鎌で穀物（イネ）を収穫する人物三人、収穫後の残穂を大鎌で薙ぎ倒す二人、左端には刈り



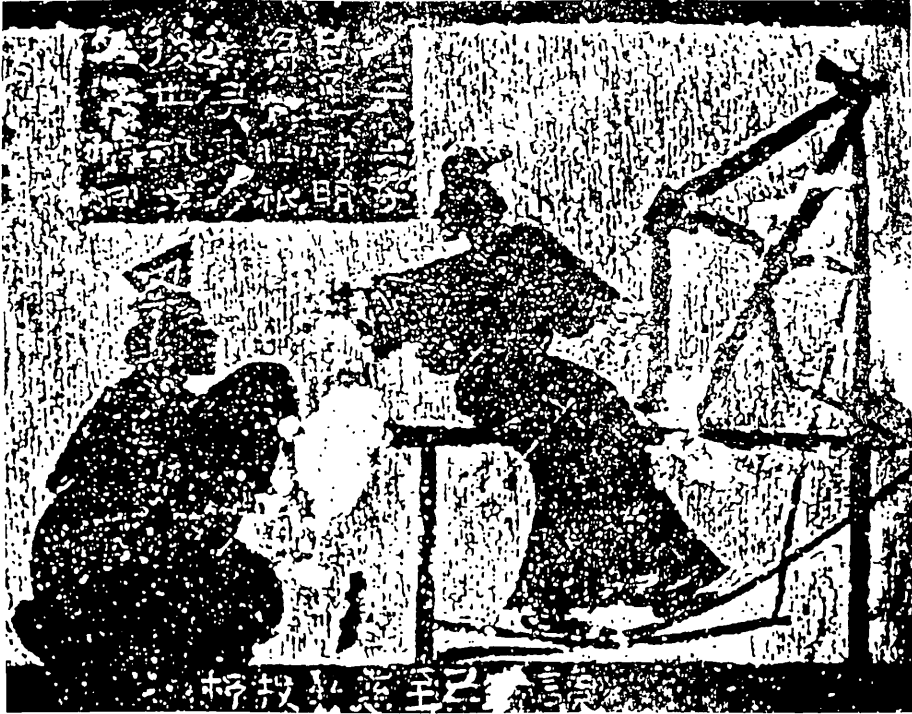
第7図 中国四川画像磚 弋射収穫図

取ったイネを天秤棒の両端にぶら下げて運ぶ人物が表されている。池にいる大きく育った草魚や鯉、群をなして飛ぶ雁、収穫するイネ、どれもありふれた農村の秋の一日を描写したものである。

これと同様に、農村のさまざまな風景を描いた画像磚も、四川省では多数これまでに発見されている。日本の古墳時代にみられる装飾絵画とはなんと隔たっていることか。

古代中国の絵画（3）「慈母投杼」

漢代中国の河南省や四川省では磚（煉瓦）で墓室を構築することが普通であったが、山東省では豊富に産出する石材を組み合わせて墓室を作ることが流行した。石材の表面をつるつるに磨き、そこの各種のモチーフを浮き彫りして墓室の飾りとする。河南省の磚室墓に見られる絵画には、神話や伝説あるいは歴史故事があたかも演劇の一コマを表すように描かれるのに対し、四川省の画像磚は一つ一つが独立して日常生活の一コマを表すという違いがあることはこれまで述べてきた。これらに対して山東省や江蘇省でみられる画像のモチーフは、貴族や大地主の



第8図 中国山東武氏石室墓 曾子画像

日常生活、すなわち死者がかつてこの世で送っていた、恵まれた生活を彷彿させる内容が主流を占めている。例えあの世に行ったとしてもこの世と同様の享樂を甘受することを願ったのか、他地域での漢代画像とは著しい違いが認められる。また儒教のお膝元のせい、忠孝を主体とした儒教の匂いのする画題が多く見られるのも特色の一つである。

ここで取り上げた武氏の絵画は、紀元後2世紀山東の武氏一族の墓地から発見されたもので、墓地の前面に設けられた石闕と墓碑からこの墓地の由来を知ることができる。それによると石闕は後漢の桓帝建和元年（147）に武氏の4兄弟により父の威徳を偲んで建設された。その後武氏一族が次々に埋葬されたが、画像をもつ墓の個人は特定できない。但し、碑文により、武氏一族は秩禄一千石の官僚を数人世に送りだした名家であり、画像石墓を建設することが可能な、当時の社会的ステイタスを知ることができる。

武氏の画像石には、伝説上でこの世の創設者といわれる伏羲から最初の王朝である夏までの有力者10人が描かれている。その後は忠孝に励んだことで名高い数人が続いて描かれている。今回取り上げたのは絵の横と下段に「曾子質孝、以通神明、貫感神祇、著号来方、後世凱式、以正撫綱」「讒言三至、慈母投杼」とあり、『孝経』の作者といわれ、孔子の弟子で、孝行として有名な曾参の故事が描かれていることが分かる（第9図）。この話は『戦国策』に書かれて

いる。それによると、曾子が殺人を行なったと母に告げるひとがいたが、母は曾子を信じて耳をかさなかった。しかし3度もそれが続いたので、さすがの母も機織りを止め思わず杼を投げ出したというものである。このシーンは一連の忠孝物語の最初に描かれていて、とりわけ当時のハイソサイティに属する人々の間に強く意識されていたらしい。

日本では卑弥呼が登場する邪馬台国の直前の時期に、中国の山東省ではこうした世界が展開していたのである。

古代中国の絵画（4）「官僚の出世図」

稲作栽培を基盤とした日本文化の母体が形成されていたころ、中国ではすでに社会の隅々まで専制国家体制が及び、生前の社会的階層性が死後の墓制のランク付けにも表現されるようになっていた。山東省や江蘇省では郡の太守（現在の日本の県をいくつか集めた道州制の知事にあたる）以下の墓には墓室内部の石に絵を刻むことが多かったことは前回見てきた通りである。これに対して、黄河以北の地域では煉瓦造りの墓室内部の壁に漆喰を塗り、その上にさまざまな日常生活を色鮮やかに描くことが行なわれていた。そこでは社会的な階層差は副葬品を納める副室の多さや副葬品の豪華さだけでなく、描かれた絵画の内容によっても窺うことができる。

ホリンゴール後漢墓は、内蒙古の省都である呼和浩特の南100kmの渾河に面する丘陵上にあり、約10km南の山西省との境には長城が横たわっている。この地域は後漢代には匈奴の後を受けて勢力を増大させた北方遊牧民である鮮卑や烏桓と対峙する場所であり、後漢王朝にとっては北方の重要な守りであった。墓は入り口から斜めに地下に潜り、最も奥まったところに棺を納める玄室を設け、入り口から玄室に至る通路左右には副葬品を容れる4つの副室が付設され、当時の太守クラスの墓にふさわしい墓室構造をしている（第9図）。

壁画は前室、中室、玄室ともすべて描かれている。この絵画に添えられた文字史料により、前室西壁から始まり、被葬者が官僚の出世街道を突き進む様子が、官僚の日常生活とともに、順を追って表現されている。これによりこの墓に葬られた主は160年代に烏桓校尉を勤め上げた人物であることが分かる。

彼の出発点はまず、人品骨柄が良いとして郷里から官僚に抜擢され（「挙孝廉時」）、皇帝の側に仕える「郎」となり、次いで陝西省北部の西河郡の「西河長史」として軍事担当となり、また「行上郡属国都尉事」として県令に次ぐ地位を得た。「行～事」は後漢代の官僚組織の上では、階級が下位のものが上位の職務を担当するときに付けられるもので、今日の「代理」もしくは「代行」ほどであろうか。今でも役所でありそうな仕組みである。その後河南省の繁陽県の県令となって一時期北方地域から職場は離れるが、最後には「使持節護烏桓校尉」として

太守クラスの地位に就いたことが分かる。

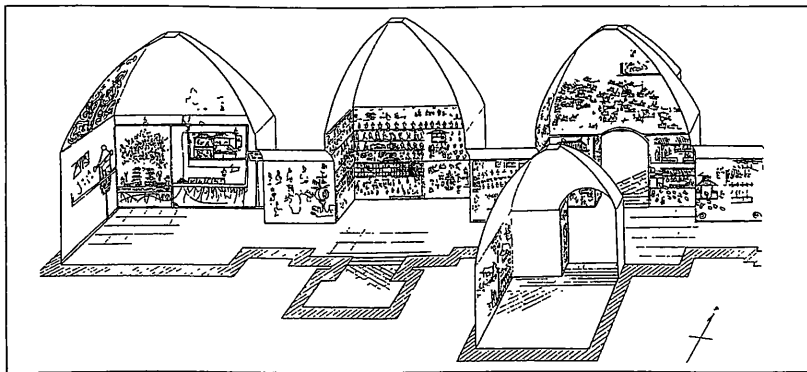
このように、墓の中を絵で飾るという手法は同じでも、そこに描かれた内容と表現される意図は、同時代の中国とも異なるし、ましてや日本の古墳時代の壁画とは似ても似つかぬものであった。

古代朝鮮の絵画（1）安岳3号墳

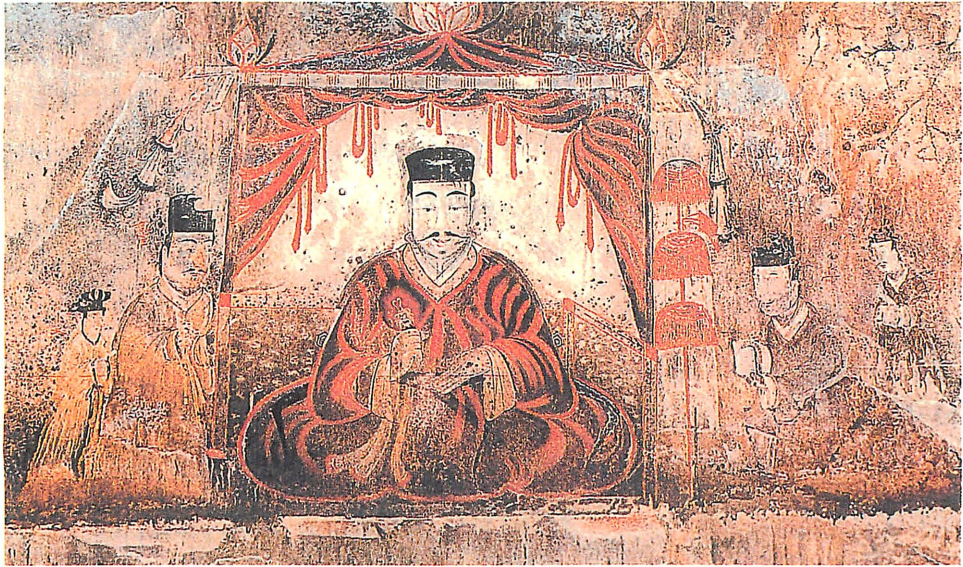
古墳時代の装飾画は抽象的な文様が多く用いられたのに対して、中国のそれは対象を写實的に描くことが基本で、観念的な世界までも具象的に狂言する事に終始したことは、極めて対照的である。古代墳墓を絵画で飾るという観点は中国からもたらされたものであったとしても、そこに埋めることのできない大きな溝が横たわっている。それでは朝鮮ではどうであったのか。

朝鮮の古墳壁画を代表する遺跡としては安岳3号墳を取り上げることができよう。これは北朝鮮の黄海北道安岳郡柳順里にある高句麗時代の古墳であり、高句麗の有力者に通有の方台形の墳丘をしている。墓室は羨室、前室とそれに付随する左右の則室それに遺体を納めた弦玄室よりなり、玄室は丁寧にも回廊で囲まれた壮大な造りとなっている。壁画は良く研磨された石灰岩に直接彩色され、死者が生前に宮室で送った生活の一部が描かれている。絵画は羨室の主人公を護衛する衛兵からはじまり、前室の儀杖兵や鼓笛隊、斧鉞をもつ武士、さらには「節」を掲げる7人の戦士などがみられる。この古墳壁画で論争になっているのは、前室西側の側面に描かれた人物像で、この人物をめぐる朝鮮、中国、日本の学者間で見解の相違がみられる。第10図でみるように中央に黒頭巾を被り、右手に鬼面文の羽毛扇を持った人物がいて、左右にはそれよりも一回り小さな人物像が描かれている。外側に行くにしたがって人物像が小さくなるのは、中央に座る主人公を強調するためか、あるいはある種の遠近法での表現であるのか。

この左側に描かれた人物の上に「帳下督」という職名がみられることから、小さく表された



第9図 ホリンゴール磚室墓



第10図 安岳3号墳壁画墓

人物は主人公に仕える侍従であることが分かる。さて、この図の上方には墨書がしたためられ、それにより西暦357年に69歳で亡くなった冬寿という人物に関係することが知られる。この墨書の「帳下督」を冬寿とみると朝鮮側の解釈のように、高句麗美川王となり、主人公とみると中国燕国から高句麗に亡命した冬寿の墓となる。

この問題を解く鍵は主人公の左側に描かれた赤い房をつけた棒（節）である。牡牛の毛を赤く染めて束ねたものを「旄」といい、これを3つつけた節は皇帝の代理人として、皇帝以外の人物誰でも殺すことができる権力を皇帝から与えられていることを示す。皇帝は彼自身が絶対者であるために、こうした身分表示は必要がない。したがって中国や日本の学者の解釈のように、中国から亡命してきた人物が、高句麗に高級官僚として仕えていたことを示すとしたほうが理にかなっている。「首切り」を意味する「斧鉞」をもった武士を従えていることも、節との組み合わせで意味があるものである。

朝鮮での最も古い古墳壁画は中国的世界の表現から始まるものであり、日本との落差は大きいといわざるをえない。

古代朝鮮の絵画（2）徳花里2号墳

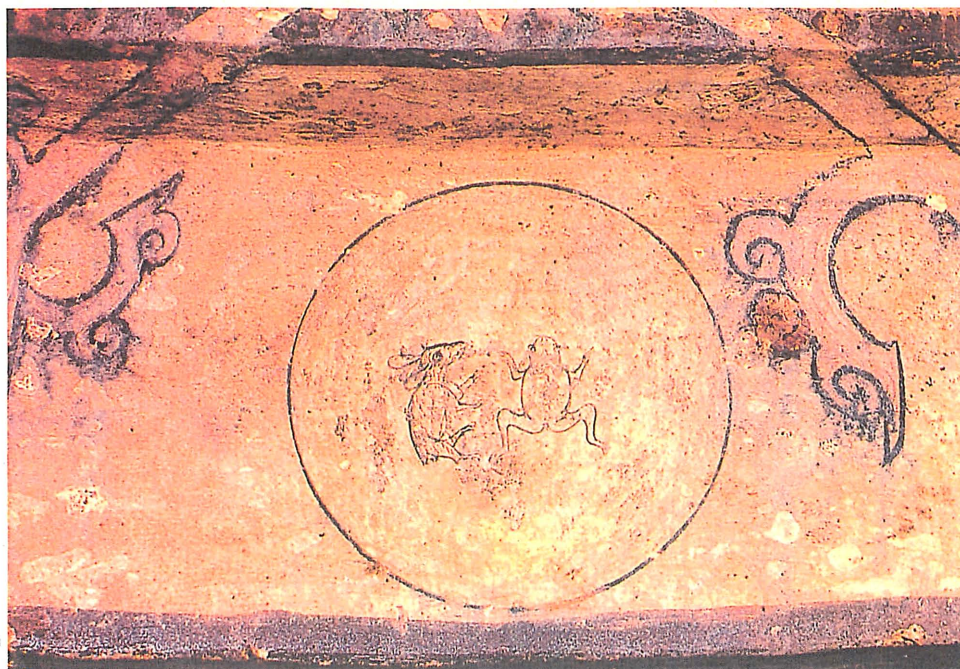
中国と並んで東アジアで装飾壁画が隆盛する例として、高句麗の墓を挙げることができる。高句麗の歴史は中国東北部の第二松花江流域から興り、南下して中国吉林省桓仁に拠った部族段階の卒本時代、鴨緑江中流域の集安に首都を置いて古代国家創設期の国内城時代、さらに古

代国家完成期の平壤時代に分けることができる。

この高句麗の墓制は国内城時代に伝統的な積石塚から石室封土墳へと転換し、封土墳内に設けられた石室の壁に装飾絵画が描かれるのである。今日までに60基以上の装飾古墳が発見されている。高句麗に積石塚が流行していたころ、遼東と中国の植民地であった楽浪地域には中国的な封土墳が形成されていて、古代国家展開過程で次第に中国的な墓制が取り入れられていったことが窺われる。

しかし、6世紀段階になると壁画に描かれる画題に大きな変化が生じてくる。すなわち、現世的な世界をあの世で再現するという意図から離れて、四神図を中心として星宿図や龍雲文などの文様が強調され、円文だけで石室内を飾ることも見られるようになる。中国的立場からすると、あらゆるものの「混淆」された状態を醸し出しているのであり、高句麗の立場からは中国的世界からの逸脱とも言える。では、なぜこうした変化が生じたのであろうか。

第11図は徳花里2号墳の石室頂部近くの持ち送り部分に描かれた月で、蛙と兎が登場している。日には3本足の鳥が、月には蛙が描かれるのが本来の姿であり、蛙が月を喰うために月が満ち欠けをするものと信じられていた。漢代になり蛙を意味する「蟾蜍」の「蜍」と兎の発音が同じのために、蛙と兎が月に住むように考えられるにいたった。一方兎は全知全能の神である西王母に仕えて豎杵と豎臼を使って不老不死の薬を作る役目を担っていたと考えるのが普



第11図 高句麗徳花里2号墳の蟾蜍と兎

通で、兎自体が単独では描かれることはなく、またけっして蛙とは一緒に表現されることはなかった。

ところが中国長江流域では月が不死の象徴であり、水神と結びついて農耕の予祝行事に組み込まれていた（ネフスキー『月と不死』東洋文庫）。そのことから水稻農耕経済が卓越する長江流域では、月に住む兎が重要視されてきたのである。してみると、高句麗の壁画画題の変化は、中国的な専制国家体制のイデオロギーから離れて、古代国家完成期において独自性を強調し、徐々に内実的な世界の表現へと転換していった姿を垣間見ることができる。

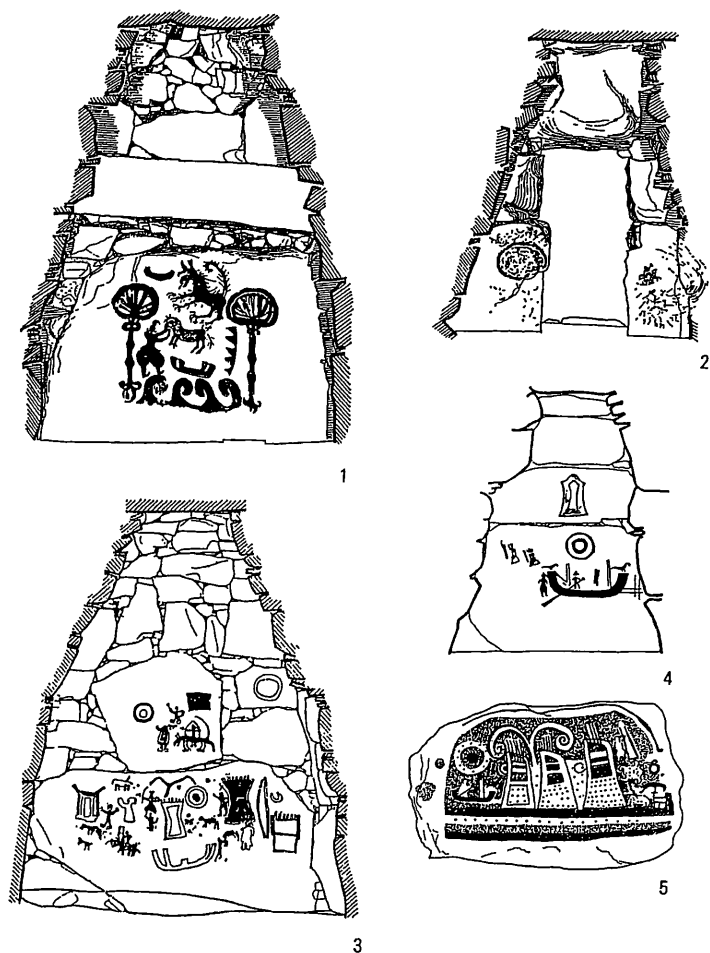
福岡県竹原古墳壁画

今回は朝鮮の装飾壁画が漢代以来の中国的リアリティの富んだ手法や表現法を導入模写することから出発し、対象の描写を変えることで独自性を出そうと努めてゆく姿をみてきた。日本の古墳壁画は弥生時代以来の抽象的な意味不明の幾何学文からはじまり、5世紀後半から具象的ではあるが解読が不可能なモチーフが描かれ、ついにはあの高松塚古墳にみられる中国的絵画手法の世界へと到達することになる。

熊本県では依然として具象と抽象を交える装飾が流行していたが、6世紀の中頃、福岡県下では、ある種のストーリーを表現したものと想定できる壁画が登場するようになる。珍敷塚古墳、五郎山古墳、鳥船塚古墳、竹原古墳の絵画がそれで（第12図）、とりわけ竹原古墳の装飾絵画は多くの研究者が思い思いに推論を提示している。その中で現在最も多くの支持者をえている考えは、金関丈夫博士の「龍媒論」で、「水辺に牝馬を牽いて、水中の龍馬をおびき、その種をえようとする場面」が描かれていると考察するものである。

しかし、日本の古墳壁画は基本的にすべて葬送儀礼に関するものであり、そのモチーフが解読不可能なのは、個別の古墳の絵画がストーリー全体の中の一部を取り出して表現したことによるものであると考えられる。珍塚古墳の「天の鳥船」は死者もしくは死者の魂を黄泉の国に送り出す運搬具であり、五郎山古墳やその他の古墳壁画にみられる鞆や矢をつがえる人物像などは、死者の魂に悪霊が憑くのを防ぐものと見なすことができる。このようにみえてくるとこれら6世紀の中頃から後半にかけての時期の装飾壁画は、すべて葬送儀礼の中の「野辺の送り」の一コマと見るのが自然である。

するとこの竹原古墳に描かれたシーンはどのように解されるであろうか。2個の大きな翳で空間を画し、そこが神聖な場所であることを表している。その中にあの世に続くことを意味する波、死者を乗せる船、馬と馬の手綱を取る人物、最上段には龍が描かれ、余白には辟邪の三角文と小船を表現している。ここで思い起こされるのは、中国東北部に生活していた烏桓の習



第12図 装飾壁画 1：竹原古墳奥壁、2：竹原古墳前室、3：五郎山古墳奥壁
4：鳥船塚古墳奥壁、5：珍敷塚古墳奥壁

俗で、それは「死者の魂は赤い糸で結ばれた犬に先導され、馬の背に乗って永遠の地である赤山にかえる」という思想である。死者の魂は波の彼方にあるニライカナイに帰るといふ信仰と、死者は動物を媒介にして魂が昇華するといふ中国北方の騎馬民の思想が渾然となったものと考えられないであろうか。6世紀の前半期は朝鮮南部の勢力争いに大和王権が介入したが、その多くの戦士は九州北部から挑発されたものであった。

中国直輸入ではなく、朝鮮と同様に在来思想と新来の観念とを融合させて新しい独自の世界を模索しようとした姿を見て取れるであろう。

『熊本大学報』第513号～524号、1995年～1996年